
空の向こうの双子月。

海猫鷗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

空の向こうの双子月。

【コード】

N3950T

【作者名】

海猫鷗

【あらすじ】

優秀な人々は人工衛星『つきかがみ』に移住し、着実に文明の衰退していく地球でのお話。

月と『つきかがみ』が並んだ様子を見ようと、病院を脱走し迷子になった少女と、偶然出会った少年。

二人の会話は、とても穏やかなものだった。

その裏に何事もなければ、きっと幸せな時間だったはずなのに……。

「ライトノベル作法研究所」と部活で公開し、加筆修正を加えた物です。

寝台を軽く軋ませ、二人で並んで座る。

真っ白なシーツに、そっと置いた右手。

ぼくの隣の彼女は、すごく満足そうな顔をしていて。

ぼくはきつと、今にも死んでしまいそうな顔をしている。

やがて、彼女は本当に幸せそうな笑顔でこっちを向いた。

「私、貴方に逢えて、良かったです。」

今でも、私は心の底からそう思うのですよ」

彼女は寝台から立ち上がり、そっと両手を広げた。

月光に照らされて、穏やかに微笑む。

どんなものも受け入れるかのように。

どんな運命でも受け止めるかのように。

そんな彼女の姿は、女神のようにすら見えた。

泣きたいと思った。

だけれど、ぼくは泣けなかったんだ。

ううう、困りました。どうしてこんなことになってしまったのでしょうか。ううん、ダメです、過去を振り返っても仕方がありません。

そう、昔の人は言いました。

若いうちは前だけ見て、決して振り返らず猪突猛進全力ダッシュで突っ走れえっつ！って。

今は亡き私のお祖父ちゃんという言葉ですが、昔の人には違いないのでよしとします。

いつたいなにかこんなに困っているのかと言いますと、迷子にな

ってしまつたのです。そんな遠くまで来てないはずなんですけどね。

空に浮かんだ双子月が綺麗だったので、ちょっとお散歩に出たらもう迷子でした。仕方がないので夜空にぼっかりと浮かんでいる双子月を見ながら歩き続けている次第なのです。はい。

だって、今夜の双子月はすごく珍しいんです。満ち欠けの周期も軌道も全然違う二つの月はほとんど同じ形にならないのです。ところが、今夜は二つとも丸いのです。まあ、まだ満月ではないですけど。明後日の晩に、二つとも満月になるのだそうです。だからつい、お祖父ちゃんからもらった『でぢたるきやめら』通称『でぢきやめ』を持って、私は外に出たのです。

『でぢきやめ』は前世紀の素晴らしい文明の利器。今はもう『ばてり』が切れて、ただの金属の塊に成り下がっています。まだ私小さかった頃には、お祖父ちゃんがこれで写真をばしばし取っていました。この小さな画面にぺかりと浮かぶ写真はすごく幻想的なものでした。

けれど、この『でぢきやめ』、使うことができるのはお祖父ちゃんが最後でした。優秀な人間がみんな双子月の片方である、人工衛星『つきかがみ』に移住してから百余年。近年、加速度的に衰退し続けている地球文明では『でぢきやめ』は扱いきれない超高等技術なのです。

私はぎゅっと『でぢきやめ』を握って、気合を入れ直します。

病院の近くの時計台はまだ見えませんが、大丈夫です、歩いて行けばきつと帰れるはずなのです。

さて、こんな考え事をしている場合ではありません。私は一刻も早く帰らないとだめなのです。看護婦さんや院長先生に怒られてしまいます。院長先生はともかく、看護婦さん達は怒るととっても怖いのです。

私が彼と出会つたのは、そうして土手を歩いてきた世紀末のこと

でした。

風にあたろうと土手を歩いていたら、淡い色の入院服の少女がこちに進んできています。靴は粗雑なサンダルだ。双子月に見惚れているのか、ぼくには気づかない。そのまますれ違いかけ、やっぱりまずいだらうと思ひ、ぼくから声をかけた。

「あの……」

「は、はいっ？」

すごく裏返った声だった。長めの黒髪と白い肌が対照的な人だ。熱があるのか、顔が少し赤い。

「えっと、私、なにかしましたのでしょうか」

「いや、ただ、入院服だったから……」

「あつ、そう、そうなのです。私、迷子なのです。丘の上病院ってどこでしょう、知ってます？」

確か、向こうの丘の上だ。って、そこから歩いてきたのか。しかも裸足で。丘の上病院ってかなり遠かったとはずだけど。そこから歩いてきたというのなら、健脚なんだろうか。華奢な身体つきや今にも折れそうなくらい細い手足を見ていると、とてもそうは思えないんだけども。

「いや、知ってるけど。ってか、反対方向だと。こっからだ北側だから、月を追いかけてたら帰れないよ」

「はわわ、私、どんどん遠ざかっていたのですか。どおりで丘の上時計台が見えてこないわけです」

「帰れるの？」

「ええ、大丈夫です。地球は丸いとお祖父ちゃんが言っていました。昔の人曰く、地球は青かった、ですよ」

どこが大丈夫なんだろう。すごく不安だ。この子の頭も。この子の将来も。

まあ、放っておけばいいか。関わるのもそれはそれで面倒だ。後味は悪いけれど、視界に入る全ての人を助けて回れるわけでもなし。ぼくには、散歩と言う超重要任務があるのだから。

「わざわざ教えてくださって、ありがとうございました。ではでは、私はここで失礼しますです」

彼女はそう言ってぺこりと頭を下げて……。

さっきと同じ、病院から遠ざかる南の方向へと歩き出した。

「ちょ、だから、そっちは反対方向だって。北に行かなきゃ」

「ををつ、そう言えばそうです。えっと……、北はどっちにあるんですしたっけ？」

なんとも気まずそうに、そわそわしながら彼女はぼくを上目遣いで見詰めてきた。

まあ、仕方ない、か。案内してあげよう。どうせ明日も昼間はカーテンを閉め切って一秒でも長く眠ることに全身全霊を注ぐに決まってる。多少の夜更かしは今更だ。

「あー、よし、丘の上病院まで連れてってあげよう」

「ふわわ、なんてお優しい方。ありがとうございます。私、空蝉みんみんつていいいます。よろしくです」

「みんみんさん？」

なんか夢い名前だ。騒がしくはしゃいだ拳句、一週間くらいでころりと死んじゃいそうな、そんな名前じゃないか。いや……、ちょっと不謹慎だったかな。彼女の入院服を見て、そう思い直し、一人心中で反省する。

「はいです。みんみん、と言います。えっと、失礼ですが、お兄さんのお名前は？」

「……………ごめん、自分の名前嫌いだから」

これは本当。理由はまあ、いろいろ。

「ええーっと、なんて呼べばいいでしょうか」

「んー、みんみんさんだよね？」

「はい。私はみんみんですよ」

「じゃあ、ぼくはいいいいいよ」

「にいにい蝉ですねっ!」

「うん」

蒸し暑い夏の夜。

昼間はさんざん鳴いていた蝉たちは大人しくしている。

騒がしいのはぼくらくらいのものだ。

「にいにいさん、にいにいさんは何歳なんですか?」

「十五くらいだと思うよ。みんなさんは?」

「私ですね、なんと、昨日十四になったばかりなのですよ」

「若いね」

いや、ぼくもそう変わらないけどね。まあ、なんとというか、彼女の笑顔はぼくなんかからすると、若々しくて眩しいくらいだ。

「うふふ、まだまだぴっぴちなのですよ」

その表現はあんまり若くない気がするの、ぼくだけだろうか。

「みんなさん、なんで病院ぬけてきたの?」

「わ、私は、病院抜けてなどいません。真面目な優良患者さんですから、夜中にそつと窓から脱走とか、悪い不良患者さんのするような悪い悪戯は全くしてないのです」

分かりやすい子だ。両手を振ってばたばたと否定する子なんて本当にいたのかと妙な感慨にふける。

「ん、分かった。君が『悪い不良患者』だったことは十二分に」

何が悪いって、多分、頭が悪いんじゃないかな? どうせ慌てていて間違えただけだろうけど。図らずも間違っちゃいない感じになつたわけだ。

「はうう、だからそんなことはないのですよ」

「いや、どっちでもいいけどね。みんなさんはなんでこんなとこ歩いてたの?」

「……双子月が綺麗だったので、つい……」

真っ赤になつて俯くみんなさん。ぼくには恥ずかしがる理由が分からない。

「んー、いい理由だね。情緒がある感じ」

「えへへ、そう言っていたけると嬉しいです。前にお友達にババ臭い、って言われて。私はそんなことないと思うんですけど」

みんなさんは恥ずかしそうに顔を赤らめ、にっこりと笑う。素直な感情表現に、若干あてられて慌てて眼を逸らした。

「みんなさんは月が好きなの？」

「ハイです！ おじいちゃんが双子月が好きで、よくお月見してたのですよ。あとあと、月の観察会もしました。私も、双子月が大好きですよ！」

「へえ……………、そっか。だから、こんなに月を見るのに夢中になつてたんだね」

きらきらと目を輝かせるみんなさんは、ひどく純粋で、ひどく魅力的で、とてもかわいらしかった。けれど、その隣というのはぼくにはちょっと居心地が悪くて、ぼくは息が詰まったような感覚を覚えた。

そんなぼくの様子に彼女はふと、気遣うようにぼくを見てきた。

「あの……………えと、にいにいさんは、双子月、嫌いなのですか？」

「いや。月は、好きだよ。わりとね。ただ、『つきかがみ』は……………、うん、あんまり好きじゃないかも」

それだけの回答を静かに咀嚼して、彼女はそれ以上何も訊いてこなかった。その心遣いが優しく、また同時にぼくはそれを辛いと思ってしまう。

静かに、少しだけ重くなった空気をまとって土手を歩く。

あまり手入れのされていないコンクリートから、のぞいている草をぼくがざくざくと踏む音。

みんなさんのサンダルがぺたりぺたりと、地面を踏みしめる音。夏だけけれど、あまり湿度が高くないからか、そこまで暑くはない。蝉達の声もしないし、聞こえる音はほんの少しだけだ。

ざあっと土手を風が吹き抜けた。

それで気分を仕切り直したのか、隣で小さく息を吸う音が聞こえ

た。

「えつと、にいにいさんはどうしてこんな時間に？」

みんなさんがひょこんと首を傾げる。

「なんか、動作の一つ一つが子供っぽい。人懐っこそうな丸い目がぼくを映している。」

「特には。ちよつと風にあたりたかったから、かな。ちよつとした散歩だよ」

「はうっ、もしかして、私のせいで長引いてますか？」

「まあ。あー、でも、別に用もないし」

「ついでに暇だし。いや、退屈だからむしろいい暇つぶしなだけれども。」

「みんなさんには、少し恩着せがましい言い方になってしまったかもしれない。」

「うっうー、なんと優しいお方でしょう。冷たい現代社会の天然記念物、下町に残る優しさ、日だまりのような温もりとはこのことです。思わず惚れてしまいそうです」

「ぼくは冷たい方なただけ。本当に面倒になったらみんなさんを置いてさっさと帰る自分が、ありありと想像できてしまって、ちよつとへこむ。たぶん事実なんだろうけど。」

「そんなに悪い気はしないけど、ね。」

「とにもかくにも。こんな感じに互いに他愛のないことを話していれば、丘の上病院まで二時間半も、そう長くはないだろう。なんとなく、ぼくはそう思った。」

ふと、私は思いついて、にいにいさん呼びました。

「にいにいさん、ちよつとこっち向いて下さいです」

「ん？」

「ぱちり」

両手の親指と人差し指とで作った長方形の中に、不思議そうな顔のいにいさん。私は満足して、うんうん、と頷きました。お祖父ちゃんの『でぢきやめ』にちよつと似ています。お祖父ちゃんの『でぢきやめ』と違ってものは残りませんけど、こつすればちよつと他よりも思い出が残る気がするのです。

「えつと……………」

かくりと首を傾げるいにいさん。私はさつき思いついたことをきちんと説明してあげました。

「じゃあ、それがみんなさんがお祖父さんからもらったデジカメ、だね？」

いにいさんは私の持っている鉄の塊を指さします。まじまじと『でぢきやめ』を見つめるいにいさんの熱い視線が、ちよつぴりくすぐつたいです。でも、いにいさんが食い入るように見るのも当然なのです。『でぢきやめ』は珍しくてそんじょそこいらで見れるようなものではないのです。

「その通りです。前世紀の文明の利器、『でぢきやめ』なのです。これではちりとやると、どんな風景もここに残るのです。いつでも見られて、美術館みたいですよ」

「へえ。それはすごいね。確かに、前世紀はいろんなものがデジタル化されていたらしいけど。カメラなんて今じゃ七五三と結婚の時からいしか見ないもんね」

しかも、写真を撮ってもらうのにはたくさんお金が必要なのです。お祖父ちゃんが高すぎるっていつも怒っていました。お祖父ちゃんはその風を怒ることをキレルって言うていましたっけ。あ、違います。ぶちギれる、です。

私はいにいさんに『でぢきやめ』自慢を続けます。

「しかも、色もそのまま残るのですよ」

「花とかも綺麗にカラーで？」

いにいさんは目を丸くしました。今では写真は白と黒ですから当然です。けれども、この『でぢきやめ』なら赤も青も緑も紫も橙

も、そして勿論白と黒も綺麗に残ります。

「はいですよ」

「さすが前世紀。『つきかがみ』にはそれもあるのかな
にいにいさんは眼を細めました。」

双子月は相変わらず空の向こうです。

「ありますよ、きつと。もっともつとすごい『でぢきやめ』がある
に違いありません。ううん、『でぢきやめ』だけじゃないです。い
るんなものが、すごい立派で便利になっているはずですよ」

私は空に浮かぶ双子月を見上げます。どっちがウサギさんのいる
月で、どっちが『つきかがみ』なのか、今の私達には区別すらでき
ないのですけれど。あの空の二つの月のどちらかで、私達の遠い親
戚が暮らしているはずなのです。

けれど、にいにいさんは少し冷めた表情をしました。

「どうかな。『つきかがみ』で人間が殺し合つて、とつくに絶滅し
ているかもしれないよ。他には、そうだな、食糧難とかで文明の発
展どころじゃなくなっているかも」

にいにいさんの声はなんだか憐れんでいるように思えました。い
つたい誰を憐れんでいるのでしょうか。どうして、憐れんでいるの
でしょうか。それは私には分かりませんし、多分、訊いていいこと
でもないでしょう。さっきの月は好きだけれど、『つきかがみ』
は嫌いだというのと、同じように、です。

だから、私はその言葉の真意を問うことはしませんでした。

代わりに、にいにいさんと目を合わせて、きちんと彼の言葉を否
定しました。

それくらいは、してもいいかもしれない、と思ったのです。

「私はそうは思いません。『つきかがみ』はみんなが仲良く平
和に暮らせる天国みたいな場所だと私は思います。」

ここでは衰退した前世紀の技術も、『つきかがみ』ではさらに発
展していると聞きます。あくまでも都市伝説です。でもでも、私は
そういう夢のあるお話は信じることにしているのです」

にいにいさんはまだ、哀しそうな眼をしています。

「でも、こんな都市伝説だってあるよ。前世期の遺物を持っている人間は、『つきかがみ』の使者に殺される、って。みんなさんだっけって聞いたことあると思うけど」

ゆっくりと、やんわりと反論するにいにいさんの姿はまるで、血を吐くようでした。病院で血を吐いて苦しんでいたお友達の顔が、自然と思いだされるようです。それは私には、泣きそうな顔にも見えませんでした。

ええ、確かに、前世期の遺物を持っている人が神隠しにあう、というお話はともよく聞きます。でも、私はおじいちゃんから『でぢきやめ』をいただいたから、なにか危ない目に遭ったことなんて一度もないのです。

だから、私は立ち止まって、双子月を見上げて言いました。

「前世期では、『ろぼと』という機械があつて、『ねつとう』で世界中が繋がつていて、『ぱすこん』がたくさんのお仕事をしてくれて、『てるび』で動く紙芝居を見て。『ろけいとつ』という塔が『つきかがみ』まで人を乗せて行った……。そんな、お話をどんな子供たちだって一回は聞いたことがあります。でも、私達にとつてはそれはただの夢物語です。もはやSFの世界ですらありません。

そう、夢物語なのです」

双子月に手をかざします。

もちろん、掴めはしないのですけれど。

掴もうとしても、触れることすら叶わないのですけれど。

そうして、『つきかがみ』は夢物語だと確認するのです。

『つきかがみ』は夢のような世界。

だからこそ、私はこう言うのです。

「夢物語に、どうして夢をみてはいけないのでしょうか」

さわさわと土手の草が揺れています。

土と草木と、そんな自然の匂いがしました。

私は、険しい顔で黙りこくっているにいにいさんに、微笑みかけ

ました。

「想像するのは自由です。なら、たくさん想像しちゃいましょう？
空の向こうで何が起きているかなんて、私達にはどうせ分かりつ
こないんですから。そして、同じ想像なら、幸せな想像の方がいい
と思いませんか？」

「……………うん、そうだね」

にいにいさんは、ぎこちなく、それでも笑い返してくれました。
でも、私にはそれだけで十分です。

私は空を見ながら、双子月をぱちりとやりました。きちんと、私
の中にその写真が記憶されました。こうして綺麗な思い出がたくさ
ん私の中に溜まっていくことは、素敵なことなのです。

「私、今日夜のお散歩に出て、にいにいさんに会えて、本当に良か
ったです」

「そりゃ光荣だね、お姫様」

照れたのでしょうか。にいにいさんはそっぽを向いて、そう言い
ました。

でも、本当に良かったと、私は思うのです。

こんなに楽しい気分になるのはすごく久しぶりでした。

だから、満月になって並んだ双子月を、にいにいさんと二人で見
たいなあ、なんて思ったのは、私の贅沢過ぎる我がままなのでしょ
う。

みんみんなを丘の上病院に送り届けてから二日後。

夜空には二つの満月が浮かんでいる。

ぼくはやっぱり土手を歩いていた。

すごく気分が悪い。

「かぐや、どした？」

横にはぼくの嫌いな上司がいる。ぼくはこの人の黒い目が嫌いだ。

この人がくわえた煙草も煙が嫌いだ。この人の黒い長髪が嫌いだ。この人のシルバークセサリーが嫌いだ。話し方も性格も雰囲気も声も嫌い。漂う煙草と整髪料の匂いが嫌い。この人の全てが嫌い。そんなこの上司は、ぼくの育ての親で、ぼくの名付け親で、ぼくの一番嫌いな人だ。

ちなみに、このかぐやというのは、ぼくの名前。

ぼくの嫌いな人がつけた、ぼくの嫌いな、ぼくの名前。

「今日を振り返っていただけですよ、夜乃宮さん」

夜乃宮さんはぼく同様、自分の名前が嫌いな人だ。

だから嫌がらせとして名前を呼んだ。

案の定、彼は顔を歪めて嫌悪感を丸出しにした。

気持ちが多少なりとも満たされる。

「ふん。嫌なガキ。誰が育ててやったと思ってんだ」

「どうせ上からの命令でしょう」

「でなきや育てねー。俺はお前みたいな奴が大嫌いだ」

「ぼくも夜乃宮さんみたいな人、大っ嫌いですよ」

「……とつとと帰るぞ。あー、一応言つとくけど、自殺とかすんな

よ」

ぼくの嫌いな仕事を共にする、ぼくの嫌いな上司は、全然ぼくのことを分かっている。誰が死ぬか。この程度のこと。今更にもほどがある。

まあでも、今の僕はそれだけ酷い顔をしているんだろう。

ぼくの嫌いなぼくの仕事は、人殺し。

地球に残された劣等人類達が『つきかがみ』を恨み復讐することを恐れた『つきかがみ』の自称高等人類は、それはそれは高尚で素晴らしいことを思いついた。そのために、クローン技術で作られた家畜の如き人類もどきのぼくらを、地球へと送り込んだ。

残存する文明の利器を壊し、作り手と使い手を殺すように。

劣等人類達が、二度と文明を栄えさせることのないように。

それが、ぼくの嫌いなぼくの仕事。

地球の文明が異常な速度で衰退したのは、ぼくらの仕事の成果。今、ぼくの右腕の中には、人の首がある。

病院を出た時にはまだ温かった。

もう冷えて硬くなった首。

彼女の血が、ぼくの手にこびりついている。

指と爪の間に入り込み、乾いていく。

彼女を殺して、こんな気分になるくらいには、ぼくにも普通の感性がまだ残っていたみたいだ。

不思議と、ぼくの腕の中の彼女の表情は、悲しいくらいに穏やかだ。

彼女は放っておけば勝手に死んでいくような状態だった。

今の地球の医療技術では、みんなさんを数年生きながらえさせるのがやっとなのだから。そして、みんなさんはそれを知っていたんだと思う。妙な諦観と、世界を俯瞰するような彼女の瞳は、そのせいなんだと、ぼくは思う。

まあ、彼女の思いをぼくが勝手に想像するのは、彼女にとっても失礼だと思うから、ここまでにしておくけれども。

そんな彼女は、にいにいさんが殺してくれるならいいです。と、あっさり了承した。ただ、数分だけ、二人で病院の窓から満月の双子月を眺めさせてください、と、本当にささやかな願いだけを口にして。二人で彼女の寝台に並んで座って、空の双子月を見た。たったそれだけのことで彼女は満足して、『つきかがみ』の所業を受け入れた。そして今は、ぼくの腕の中で冷たく、硬くなっている。穏やかな表情で、静かに、永遠に覚めない眠りの中にいる。

「まったく、こんな郊外の微妙な町に遺物持ちが残ってるなんてな。誰かさんが散歩なんかしたせいで、とんだ残業させられたぜ」

彼女が素直に受け入れてくれたからといって、ぼくの罪悪感が軽くなることもない。むしろ余計に重くなってぼくにのしかかってくる。

そう、夜之宮さんが言った通りに、彼女が今この世にいないのは、

ぼくのせいなのだから。ぼくがあの夜彼女と出会ったせいで、『つきかがみ』の本部に彼女が遺物を持っていると、気づかせてしまったから。

空蝉 みんな。

彼女の血を全身に浴びて、ぼくは夜の土手を歩く。

あの夜、ぼくらが出会ったのは不運だったのか。

それとも彼女が言った通りに、幸運だったのか。

偶然だったのか、はたまた必然だったのか。

夜乃宮さんはもう何も言わない。

煙草の煙が不快だ。

夜之宮さんは、もう自分の仕事を鬱陶しいとか、面倒だとかそんな風にしか思っていないのだと思う。ぼくも、遠からずああなるんだと思う。どんどん気持ちが悪化して行って、やがてなにも感じなくなるんだろう。そうなるように、ぼくらは造られたんだから。そうならなければ、ぼくらは処分されるのだから。

そういう未来が分かっているからこそ、ぼくは彼女と過ごした時間忘れちゃいけないと思った。

彼女は、ぼくに優しいと言ったことも。

でも、ぼくはこんなにもどす黒くて汚くて血塗れなことも。

彼女は、『つきかがみ』を天国だと信じていたことも。

けれど、そこはこんなにも醜く卑劣に穢れていることも。

天国なんてどこにもなくて、地獄しかないことも。

いつになく、柄にもなく、やりきれないこの気分も。

途方に暮れて、わけもなく、この土手を歩いたことも。

全部全部、忘れないで大切に持っていよう。

空の双子月はどちらが本物か分からないくらいに似ている。

まん丸の黄色い月が、双子みたいに並んでいる。

どちらかが本物で、どちらかは鏡に映った汚い虚像だ。

ぼくも、みんなさんのように信じてみたいと思う。

『つきかがみ』は天国ではないと知っているぼくだけだ。

本物の月は、もしかしたら、天国なのかもしれない、と。

そんな、夢物語みたいな儂い幻想を、信じてみようかと思う。

みんなさんの首は後で月に埋めようと思う。

『つきかがみ』じゃなくて、本物の綺麗な月に。

ぼくにでも、天国かもしれないと思える月に。

でも、その前に一つ、やらなきゃいけないことがある。

腕の中のそれを、ぼくは大事に抱え、ぼくはみんなさんの真似をして、両手の親指と人差し指で長方形を作った。その中に二つ並んだまん丸の双子月を入れる。

「ぱちり」

デジカメよりもずっといいカメラで双子月を撮るように。

みんなさんを殺した夜をずっと覚えていられるように。

みんなさんと二人で見たこの双子月を忘れないように。

ぼくは、壊れて動かない彼女の『でぢきやめ』をポケットに押し込んだ。

どこからか蝉の鳴き声が聞こえたような、そんな気がした。

(後書き)

拙い文章ですが、感想や評価をもらえれば、と。。。
若干、超展開のけがあります。

なんとか直そうと努力はしましたが、、現状これが精一杯で。。

ラストには賛否両論あると思います。

これでいいと言われ、これは酷いと言われ、好きとも言われ、嫌いとも言われました。

あちこちで感想をもらい、何度か改稿していますが、このラストを変更する予定は一切ありません。

これの初稿を書いていた時、ベランダで蝉が鳴いていました。

書き終ろうとした同じ日の夜、蝉の鳴き声はもうしませんでした。

翌朝、ベランダには蝉の死体が転がっていました。

みんみんは、あくまでもこの物語が生まれてくるときに鳴いていた彼で、終盤に差し掛かった時には声をあげられなくなっていた彼で、そしてきつとどの夏も鳴くであろう彼らです。

夏になって蝉の声が聞こえた夜に、ふとこの話を思い出していただければ、と思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3950t/>

空の向こうの双子月。

2011年8月8日03時17分発行